

～文化の風が吹くまち ちくしの～

# 文化薫道



## ◆其の百五

日本遺産の世界 in 筑紫野

万葉歌を

よみとく



今よりは城山の道はさぶしけむ  
我が通はむと思ひしものを

『万葉集』巻四 五七六

(訳)今からは城山(きやま)の道はきつと寂しく思われることだろう。私がついて行こうと思つていたのに。(『新日本古典文学大系』より)

これは、筑後国府(久留米市)の長官を務めていた葛井連大成(ふじいのむらじおおなり)が、大宰府の長官であった大伴旅人が昇進して都へ帰京した後、旅人をついて詠んだ歌です。大成は、旅人の邸宅で開催された梅花(ばいか)の宴にも出席しており、そこでも歌を残しています。

この万葉歌が詠まれた奈良時代には、都と地方を結ぶ古代官道が整備され、九州にも、各地の国府から大宰府を目指して官道が伸びていました。この歌に詠まれた「城山の道」は、その官道のうちの一つだったと考えられます。



▲日本遺産「古代日本の「西の都」」ホームページ

文化財課



▲葛井連大成の万葉歌碑

「城山」とは、大宰府の南の守り、基肄城(きいじょう)がある、現在の基山を指していると思われる。す。「城山の道」は、城山の東の麓を通り、肥前国(佐賀県)と筑前国(福岡県)の境にある両国峠を越え、市内萩原へ抜ける山道であったと考えられています。

大成は、大宰府に旅人がいなくなつてしまった悲しさと峠越えの山道を通る寂しさを、この歌に重ね詠んだのでしょう。万葉歌は、文学的に作者の心の内を感じることができただけでなく、歌を詠んだ場所や風景などもあわせてみると、より深くその意味を感じ取ることができるようです。